

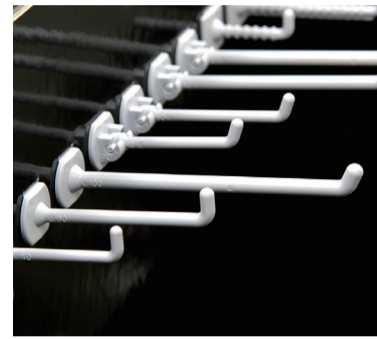
1 技術を深めながら、興味は全方位に張り巡らせて。それが自社の可能性を大きく広げる。

数ある加工業者の中で、発注側は「どこに依頼したらいいのだろう？」と悩むことは多い。受注側として同じ加工業者の中で頭ひとつ、いや2つも3つも飛び出すにはいかにすればいいか。その命題をスピーディーな対応力・マーケティング力、そして企画から試作・金型製造・製品加工までの自社完結力で発展してきたのが河島製作所だ。創業は1985年。当時28歳の河島直也代表取締役がたった一人で、20坪の長屋から始めた会社だ。それがアイデアと行動力で規模を拡大し続け、大東市への移転を経たのち、創業30年目にして発祥の地である東大阪に帰り、最新設備を導入した500坪もの工場を竣工。「マッハの河島」と呼ばれて、顧客に喜んでもらうことだけを考えてきました。そう笑う河島氏。先ほどの強みリストに加えるなら、この社長の人間力によるところも大きい。同社では7軸ロボットはもとより樹脂成形における最新設備を備え、3Dスキャナーや光造形モデリング・マシンで、内部デザイナーによる企画、設計後すぐに造形・評価が可能。また昨年社内で金型を製造できる体制が整ったのも大きい。金型メンテナンスもレーザー溶接機にて緻密に自社対応できる環境を持ち、プラスチック製品の企画から射出成形を主体に超音波溶着・塗装・印刷・アッセンブリまでトータルな生産対応をしている。また社員の育成、特に技能検定に力を入れており、プラスチック成形部門1級技能士が4人在籍している。これまではおもにOEM受注によって製造・販売をおこなってきた。代表的な商品ではボードフック・ネットフックなど約3,600種類以上の多品種を生産、「K」マークの樹脂製フックのシェアは国内



IQOS本体を傷や衝撃から守るだけでなく、業界初の「ファンタッチロック機能」(実用新案登録済)を搭載した、オリジナルロックハードケース。ケースを装着したまま充電可能で、文字通りファンタッチで開き、片手で蓋を閉じることが可能。カラーは5色で展開

1位・2位を競っている。またスマートフォンケースはこれまでに200種類以上、累計1,000万個も製造してきた。それに加えて最近では自社ブランドである「KAWASHIMA LINE」の販売を促進中。スマートフォンケースの製造へ参入したのも早かったが、今度は話題の加熱式タバコ「iQOS(アイコス)」に着目し、独自のロック機能を持つケースをリリース。壊れやすい充電器に開閉機能とプロテクト機能を付加して負担がかからないようにしたもので、昨年秋の発売からすでに5万個以上を出荷している。さらに最新作となるのが、Google Cardboardに対応したスマートフォン用の紙製VR(バーチャリアリティ)ビューア「VRゴーグル」だ。この製品はボール紙製の組み立て型のVRヘッドセットで、顔と接触する3箇所にスポンジを配置することで、Cardboardにありがちな汚れやヘタレなどを防ぐ仕様。スマホの脱落を抑制する滑り止め



シェア日本一を目指す「K」マークの樹脂製フック。吊り下げ什器用ボードフック、ネット什器用ネットフックなど約3,600種類もの豊富な品揃え



河島氏の顔をモチーフに、自社の最新技術を集結させてつくったスマホカバー

シートや、隙間からの光漏れを軽減する遮光スポンジ、ゴムバンドなども付属し、快適な装着感を実現している。もちろん随所に樹脂加工が活かされているが、ベースとなる素材は樹脂でなく、「紙」だ。この柔軟な発想には流行に敏感で面白いことは貪欲に素早く取り入れる、という河島氏のスタンスがよく表れている。「ものづくりの世界で30年以上やってきて、樹脂成形は得意ですし、技術もあります。樹脂だけにこだわってはいません」。そう言い切れる背景には卓越した技術や設備を持ちながら、そのうえでさらに視野を広げて挑戦する姿勢がある。それが同社の可能性をますます広げていく。

株式会社河島製作所

<http://kawashimass.com/>

東大阪市高井田中4-6-24 TEL 06-6789-5656

2 シルバーカーのパイオニアがシニアライフを楽しく潤いのあるものに変える。

現在、日本の高齢化率(65歳以上の割合)は過去最高の約26%。世界でも類をみないほどの超高齢社会となっており、さらに加速を続けている。さまざまなメーカーが高齢者の生活を支えているが、シルバーカーのトップシェアを誇る幸和製作所は、新しい切り口から快適なシニアライフをサポートする企業だ。1965年に創業した同社は、ベビーカーのメーカーとしてスタート。まだベビーカーが乳母車と呼ばれていた頃、創業者がこの製造技術をもとに高齢者のための商品開発に着手し、1970年国内初となる高齢者用の歩行補助車を誕生させた。以来、業界トップを走り続け、2007年には「TacaoF(テイコフ)」ブランドを設立。「歩行・お風呂・トイレ・睡眠・食事・健康」など、高齢者にとってのあらゆる悩みを解決する「福祉用具の総合メーカー」へと発展した。最近ではロボット技術を搭載した歩行器も開発。それが2016年の「ロボット大賞」で最優秀中小・ベンチャー企業賞(中小企業庁長官賞)を受賞した「リトルキーバス」だ。こちらの最大の特徴は、センサー感知によりモーターを連動させる技術の搭載。上り坂ではオートアシストで楽に上がることができ、下り坂ではオート制御で進み過ぎを防止。またバランスを崩したり、つまずいたときなど歩行器の急な動きをセンサーが感知して、ブレーキ制御がかかり転倒を防止する。「ロボット化することで可能になることは、非常に多くあります。それを高齢者の暮らしに当てはめていくことで、さらにアイデアを広げていきたいですね」。(営業企画部次長・新井文武氏)昨年4月にはこの「リトルキーバス」が、自動制御機能付き歩行器として介護保険のレンタル対象商品に選ばれた。ちなみに



記念すべきシルバーカー第1号は1970年に誕生。ある時、ベビーカーを再利用しているおばあさんを見かけた創業者が、「もっと安全で便利なものを」と開発を決意

「シルバーカー」と「歩行器」は違い、シルバーカーは自分で歩行できるが、足や腰に疲れを感じやすい高齢者向けの手押しタイプの歩行補助具。対して歩行器は、歩行そのものに不安がある人が対象。「リトルキーバス」はロボット技術搭載の「歩行器」で、シルバーカーと電動カートの間位置する製品として、利用者の動作をアシストしながら歩行を支援する。すでにロボット部分を小型・軽量化した「リトルキーバスS」も発表した。幸和製作所の特徴のひとつが、毎年多くの新商品をリリースしていることだ。福祉関連の商品は安全性と実績が重視され、一度ヒットすると長く利用される傾向がある。そのため、多くの企業では1年間にリリースする新商品の数は少なく、中には数年おきというところもある。そんな業界において、同社では毎年20~30台の新作をリリースし続けるという、攻めの姿勢を崩さない。もうひとつは、デザイン性を考えた商品を開発していること。「福祉関係グッズを使うこと＝自身の衰えを受け入れる」と、ネガティブにとらえてしまう人もいるが、そんな考えを払拭する洗練されたデザインを



業界初のロボット技術搭載歩行器「リトルキーバス」。センサー感知による坂道でのスピード調整や転倒防止ブレーキ機能を搭載。ハンドルに静電気センサーを搭載し、手が離れた瞬間に止まり、さらに5分間触らなければ電源が切れるため消し忘れもない。バッテリーはフル充電で4時間使用可能

心掛けています。お洒落なシルバーカーや歩行器であれば高齢者はそれらを使って自らの足で歩くようになり、元気でいられるのではと考える。幸和製作所は、介護される人も家族も、使うことで生活が楽しく心が豊かになれる福祉の商品づくりを目指している。

株式会社幸和製作所

<http://www.tacao.co.jp/>

堺市堺区海山町3-159-1 TEL 072-238-0459